二人乗りの頃

本田　周

あらすじ

昭和の終わり近く。川沿いの道を走る二人乗りの自転車。弥子は田辺の背を掴んでいる。

成績優秀だが、母とその愛人橋本と気詰まりな暮らしを送る弥子と、貧困家庭で得意は万引きの田辺。二人に芽生える淡い恋心。

或る日、橋本からの性的危機を感じた弥子は、母親に親子二人だけで暮らそうと訴えるが、取り合って貰えない。傷ついた弥子の隣に田辺は黙って寄り添い、鏡文字で拙く「やこ　すき」と書いた紙片を弥子に差し出す。

田辺の書字・識字障害に気付いた弥子が教師に相談すると、誰もが最善の道を選ぶとは限らない現状を告げられ、弥子には可能性を信じて最善を選択してほしいと諭される。弥子は自分にとっての最善を考える。

三年後、偶然バス停で再会する弥子と田辺。チンピラの様相の田辺は目も合わせずに去って行き、弥子は、前を向き赤本を開く。

弥子の乗るバスを、かつての田辺と弥子の様な二人乗りの自転車が追い越していく。

登場人物表

三崎弥子（みさきやこ）（15）　中学三年生

田辺千紘（ちひろ）（15）　同　チー坊　弥子の友人

横手明恵（15）　同　弥子の幼馴染

菊池浩（15）　同

小松里香（15）　同

三崎浩美（42）　弥子の母

橋本正行（40）　まー君　浩美の愛人

矢部貴子（32）　弥子の担任教師

周研市（17）　弥子たちの学校の卒業生

○川・全景

春の柔らかい日差しの下、流れる川、空に燕。

T『昭和の暮れゆく頃』

○川沿いの道

二人乗りで走る自転車。

運転する田辺千紘（15）、後に三崎弥子（15）。

手入れされていない髪の田辺。

ポニーテールを揺らす弥子。

田辺の真っ赤なジャンパーが風で膨らみ、弥子の黄色いスカートがはためく。

○河川敷

堤防の向こうに停められた自転車。

弥子、川に裸足をつけている。

勢いよく上がる水しぶき。

弥　子「チー坊、こっちこっち」

弥子が田辺を手招きする。

弥　子「湧き水の出口なの、ここ。綺麗で冷たいよ」

護岸に空いたトンネルから勢いよく水が噴き出している。

田辺、穴の開いた靴下を素早く脱ぎ、ズボンをまくって、川に裸足をつける。

田　辺「つめた！　弥子、平気なの？」

驚いてよろける田辺に弥子は笑い転げる。

濡れないように、つまんだスカートをヒラヒラさせながら、川の水を蹴り上げる弥子。

応える田辺。

×　×　×

はしゃぎ疲れて川べりに腰を降ろす二人。

田辺がポケットから板チョコを取り出し、柔らかく

なったそれを、銀紙のまま二つに割って弥子に差し出す。
田辺の指先は伸びた爪に垢が詰まり、汚れている。
弥　子「（笑顔で）あ、いつもの。ありがと」
田辺も残りの板チョコを齧る。
二人、足を川につけたまま、上半身を後ろに倒して寝転ぶ。
空を見上げた二人、目を瞑る。
せせらぎの音。
川の水面がきらめく。

○タイトル

『二人乗りの頃』

○川沿いの道（夕）

二人乗りの自転車が走る。
弥子が田辺の背中に。
弥　子「さっきの場所、内緒ね」
田辺、黙って頷く。
弥　子「小さい時から一人だけで来てて。休みの日の楽しみだったの」
田　辺「うん。また来よ」
田辺の肩に顎を乗せる弥子。
安らいだ顔。

○三崎家・居間（夜）

賑やかなテレビの音。
夕食の配膳をしている三崎浩美（４２）。
弥子の声「ただいまー」
橋本正行（４０）がジャージ姿で、寛いでビールを飲んでいる。

制服の弥子が入って来る。

橋　本「おう、おかえり、やっちゃん」

弥　子「まー君、来てたんだ」

卓上には豪華な料理が所狭しと並ぶ。

浩美が橋本に笑顔を向けて。

浩　美「これ、こないだまー君が美味しいって言ってたからまた作ったの、どう？」

橋　本「（ぞんざいに）うんうん。ありがと」

浩美、箸を運ぶ橋本を覗き込んで。

浩　美「美味しい？」

橋本、頬を膨らませて頷く。

浩美、弥子に向けて機嫌よく。

浩　美「あんたも食べるでしょ？」

弥　子「うん。着替えてくる」

浩美、いそいそと橋本にビールを注ぐ。

×　×　×

着替えて食卓につく弥子。

弥　子「まー君、こないだの話だけど」

浩美がやや怪訝な表情。

弥　子「テストの成績が良かったら、っていうの」

橋　本「ああ、あれな」

弥　子「今日ね、こないだの結果が来て学年三位だったの」

弥子、成績通知を取り出して見せる。

橋　本「すげーな、やっちゃん」

橋本が愛好を崩し、弥子も嬉しそうに頷く。

浩美は興味無さげにビールを煽っている。

橋　本「約束してた賞金あげないとな。ひろちゃん、俺の鞄取って」

浩美がセカンドバッグを橋本の許に運ぶ。

橋本、財布を取り出し、にっこりして弥子に現金を渡す。

橋　本「はい。約束の三万円」

弥　子「ありがと」

橋　本「一番になったら十万だぞ」

弥　子「それはちょっと無理かな」
橋　本「その調子で医学部とか行ってさ。学費は出すから。あれだろ、大友病院の息子より成績いいんだろ？」
弥　子「うん。隆君よりは」
橋　本「（ご満悦で浩美に）な！　凄いよな、やっちゃん」
　浩美、橋本に適当に一瞬微笑み、後は上の空。
橋　本「したら、ひろちゃん、お医者さんのお母様か」
　橋本、浩美に向けて嬉しそうに
橋　本「なあ。そうなったら、すげーよな」
　浩美、曖昧に頷く。
　弥子、浩美の様子を窺いながら、思い切って。
弥　子「あとね、欲しい参考書があって」
橋　本「おう、おう」
　橋本、機嫌良く、更に万札を取り出す。
　ニッコリして受け取る弥子。
弥　子「ありがと、まー君」
　浩美、それを一瞥。

○同・台所（夜）

　弥子が食器を洗っている。
　浩美がやって来て、換気扇のスイッチを入れ、下で煙草を喫う。
浩　美「まー君、今お風呂だから」
弥　子「あ、うん」
浩　美「あの人高校行ってない、って話したよね」
弥　子「うん。前にママから聞いた」
浩　美「まー君ちの辺りは元々周り誰も高校行ってないんだってさ。学は要らない、って。いつの時代だって話だよ」
弥　子「でも今はお金持ちだよね」
浩　美「田んぼが新幹線やら高速道路に引っかかったからね。運がいいのよ。にわか成金」
　浩美、煙草の煙を換気扇に向けて吐く。
浩　美「まー君、自分は学校行ってないから、私が短大出てるの

とか、凄いことなわけ」

弥　子「うん」

浩　美「あんた頭いいからさ、いい大学に入ってくれたら、まー君喜ぶし、医者にでもなってくれたら、鼻高々よ」

弥　子「……」

弥子、洗い物を続けながら、適当に聞き流している。

浩　美「せいぜい、頑張りな。勉強や学校の事なら、幾らでもお金出すから、あの人。あんたなら上手くやれるでしょ」

弥　子「わかった」

浩　美「全く、私には質流れの指輪しか寄越さないのにね。あんたの事気に入って、お嬢様育ちみたいにしてんだから」

浩美、灰皿にギュッと煙草を圧し潰して、去る。

弥子、灰皿を片付け、換気扇を止める。

○横手家・外観（夕）

商店街の並び。

一階に寂れた金物屋が入る小さな古い木造の建物。

二階に上がる外階段の先に玄関が見える。

○同・玄関・外（夕）

制服の弥子が錆の目立つ階段を上る。

玄関扉には、造花に囲まれたＹＯＫＯＴＥの表札。

弥子、扉を開けて。

弥　子「来たよー」

○同・玄関・中（夕）

女子レスラーの様な体形で金髪ショート、ジャージ姿の横手明恵（１５）が狭い玄関の奥から出て来る。

弥子が鞄から連絡袋を差し出す。

明　恵「お、サンキュ、弥子。寄ってく？　チー坊も来るよ」

弥　子「うん」

靴を脱ぎ、慣れた様子で奥に入っていく弥子。

○同・居間（夕）

板張りの粗末な台所と続く六畳の茶の間。
漫画や洋服や化粧品で散らかっている。
気にせず、物を掻き分け、ぺたんと座る弥子。

弥　子「今日の体育、明恵が居ないからつまんなかった」
明恵、ちょっと得意気な顔。
玄関ドアが開く音、ドスドスと足音、床が軋む音。

菊池の声「おーっす」
学ランを着た菊池浩（１５）が、鴨居に身を屈め、入って来る。
後からブカブカの学ラン姿の田辺が続く。
田辺はちらりと弥子を見る。
菊池が水滴の滴る缶ジュースを何本か卓袱台に並べる。

菊　池「ぱくってきた」

明　恵「（缶を開けながら）サンキュ」
田辺が、懐から菓子類とマンガを何冊か取り出す。
どんどんどん出て来る。

弥　子「すっごっ」
田辺、照れる。

菊　池「チー坊はやっぱ才能ちげえわ」

明　恵「チー坊、また腕上がってない？」
田辺、アイス最中を取り出すと、汚れた爪の指先で二つに割り、片方を弥子に差し出す。

弥　子「（笑顔で）ありがと。これ大好きなんだよね」
嬉しそうに食べる弥子。

菊　池「いっつも、二人で半分こしてるよな」

明　恵「姫と騎士（ナイト）。チー坊は弥子専属ドライバーだから」

弥　子「そんな事ないよ」

明　恵「じゃあ自転車乗れる様になんなよ」

菊　池「えっ、弥子自転車乗れねえの？」

明　恵「いっつもチーが弥子乗せたげてるじゃん」
菊　池「乗れねえのかよ、まじかよ」
　　恥ずかしそうな弥子。
　　玄関扉が開く音。
小松里香（１５）の声「ういーっす」
　　部屋に入って来る派手な私服の里香。
里　香「（卓袱台の上を見て）おっ！　今日も大漁」
　　菊池が親指を上げる。
里　香「来る時、明恵のママとすれ違ったよ。なんか革ジャンの若い男といた」
明　恵「ああ、新しい彼氏。ママ浮かれてんだよね」
菊　池「うちも浮かれてるわ」
明　恵「って、菊池んち父ちゃんいるじゃん。トラック乗りだっけ？」
菊　池「そ。長距離。あんま帰ってこねえから。母ちゃんは男んとこばっか行ってる」
　　明恵と里香、菓子をぱくつきながら合点がいった顔。
明　恵「そーゆーことね」
弥　子「（ちょっと驚いて）菊池んち、家に誰もいないの？」
明　恵「（こともなげに）いいっていいって。うちで飯食ってきゃいいんだから」
菊　池「俺が弁当パクってくるんだけどな」
　　一同笑う。
弥　子「（腕時計を見て）……そろそろ帰るね」
菊　池「また後で来いよ」
弥　子「うち、夜は抜けられないんだ」
里　香「弥子んとこ、親、ずっと居んの？」
弥　子「うん。居る」
菊　池「なんだよ、つまんねえの」
弥　子「（鞄を取って）バイバイ」
一　同「じゃあねー」「じゃあな」
弥　子「（田辺に向けて）またね」
　　田辺、弥子を見て小さく手を振る。

○三崎家・脱衣室（夜）

風呂上りの弥子。
脱衣室の外、トイレの水を流す音。
弥子、ハッとしてバスタオルを広げ、体の前を隠す様に覆う。
緊張した面持ちの弥子、棒立ちでドアを見つめる。
ドアが開き、橋本の姿。

橋　本「ああ、ごめん、ごめん。やっちゃん居たか」
橋本がドアを閉めて去っていく。
首元でバスタオルの端をギュッと掴んだ弥子の指先が緩む。

○同・弥子の部屋・中（夜）

パジャマ姿の弥子が本棚から、シングル向けの洒落たインテリア雑誌を取り出す。
太マジックで表紙に大きく『絶対一人暮らしする本』と書いていく。
ベッドに寝そべり、開いた本を見入る弥子。

○川沿いの道

田辺と弥子、二人乗りの自転車が走る。

○河川敷

いつもの川辺、クローバー摘みをする弥子と田辺。
田辺がポケットから板チョコを取り出して、割る。

弥　子「（受け取って食べて）美味しい」
田辺が四葉をまとめると、束になる。

弥　子「（笑って）そんなに」
田辺が板チョコの包み紙を広げ、四葉を一本ずつ並べていく。

弥　子「四葉だらけ、幸せだらけ、だ」
二人、うつ伏せに寝そべって、並べた四葉を眺める。
流れる川面、鳥の鳴き声。

○中学校舎・外観

○同・廊下

休み時間の喧騒。
鞄を持って帰ろうとする明恵を弥子が呼び止める。

弥　子「明恵！　今日は来てたんだ」
明　恵「うん」
弥　子「良かった。菊池も暫く来てないし、どうしたのかなって」
明　恵「ああ、菊池ね……。とうとう菊池の母ちゃん男と消えちゃって。なのに、親父さんも掴まんないみたいでさ」
弥　子「え？」
明　恵「菊池、うちには遊びに来てるし、明日の祭りにも来るよ。弥子も来るでしょ？」
弥　子「あ、うん」
明恵、手を振って行き、見送る弥子。
出席簿を抱えた矢部貴子（３２）が通り掛かる。
貴　子「（弥子を呼び止め）三崎さん。成績ぐんと伸びたじゃない。頑張って。この調子でね」
弥　子「あ、ありがとうございます」
チャイムが鳴り、弥子、教室へ入っていく。

○神社・境内（夜）

様々な夜店、屋台が並ぶ夏祭り。
浴衣姿も見え、大勢の人で賑わっている。
弥子、明恵、田辺、菊池、里香が連れ立って歩いている。
×　×　×
綿飴やりんご飴等食べている。

×　×　×

射的に興じている。

皆でたこ焼きをつついている。

×　×　×

楽し気に歩いている弥子たちの前方から、周研市（17）が見るからにガラの悪い連れとやって来る。

明恵が周に駆け寄って何やら話し掛け、戻って来る。

弥　子「誰？」

明　恵「覚えてない？　二コ上の周先輩。カッコいいよね」

明恵、まだ周を見ている。

里香も、明恵越しに周を見ている。

弥　子「何処の高校？」

明　恵「（こともなげに）行ってないよ」

弥　子「……」

皆で赤い提灯の灯る神社入口へ向かう。

○神社・入口前（夜）

弥子、明恵、田辺、菊池、里香、境内から外へ。

橋本の声「やっちゃん！　弥子さん！」

人波から聞こえる声にキョロキョロする弥子。

弥　子「（橋本を見つけて）まー君」

人波から抜けた橋本、笑顔で明恵と里香を見て。

橋　本「お友だち？」

明　恵「こんばんは」

頭を下げる明恵。それに続く里香。

田辺と菊池は、他人のふりをして先に行く。

橋本がセカンドバッグから財布を出し、五千円札を弥子に渡す。

弥子、当たり前に受け取って。

弥　子「ありがと」

橋　本「じゃあね。あんまり遅くなんないようにね」

橋本、連れの派手な格好の女性の許へ戻っていく。

里　香「（弥子に）誰？」

弥　子「義理の父親？　みたいなもん」
　弥子たち、前で待っていた菊池と田辺に追いつく。
明　恵「うちは小学生の時から知ってる。弥子んちのまー君」
菊　池「母親の男だろ」
弥　子「……（一瞬嫌そうな顔）」
里　香「景気いいんだね」
弥　子「よし、これで、さっきの射的のリベンジしよ。戻ろ！」
　田辺、ずっと黙ったまま。

○三崎家・居間・中

　蝉の声が聞こえる。
　パジャマ姿の弥子が伸びをしながら部屋に入って来る。
　ソファに腰を下ろし、テレビをつける。
　橋本もパジャマ姿で、電気カミソリを顔に当てながら、入って来る。
橋　本「おはよー、やっちゃん」
弥　子「おはよー。まー君今日はゆっくりだね」
橋　本「やっちゃんも、寝坊だな」
弥　子「夏休みだからね」

×　×　×

　ソファに寝そべる弥子。
　そのままうとうとする。
　橋本がやって来て、寝ている弥子の上に覆いかぶさる。
　驚いて、大きくもがく弥子。
　橋本すぐにハッとして飛びのく。
　橋本、掠れた声で。
橋　本「いや、あの……」
　弥子、起き上がると、橋本を見ずに慌てて出ていく。

○同・脱衣室

着替えた弥子が無心で洗濯物をピンチハンガーに干している。
ポロシャツに着替えた橋本が入り口から中を覗いて。

橋　本「ああ、あのさ」
強ばった表情の弥子、橋本を見ない。

弥　子「いってらっしゃい」

橋　本「あの、さっきの」
弥子の表情が更に強ばる。橋本を見ない。

橋　本「さっきの事ひろちゃんに言ったら、俺もうここんちに来ないから」

弥　子「……」
橋本が立ち去り、大きく玄関扉の閉まる音。
弥子、濡れた洗濯物を手に、へたり込む。

○三崎家・台所（夕）

テーブルの上にスーパーの袋。
食材を冷蔵庫に仕舞う浩美、すぐそばに立つ弥子。

浩　美「（弥子の顔を見ずに）なに馬鹿な事言ってるの、まー君はふざけただけでしょ」
浩美、大袈裟な呆れ顔。

弥　子「……だって、ママに言ったら、もう来ない、って」
浩美の表情が一瞬硬くなる。

浩　美「あんたが過剰反応するから、まー君がびっくりしちゃったんでしょ」

弥　子「もう来なくっていいよ……。ママと私と二人でいいじゃない。二人だけで」

浩　美「馬鹿言わないでよ。ママの稼ぎだけで暮らしてけないでしょ」

弥　子「高校入ったらバイトとかするから」

浩　美「はあ？　あんただって大学行きたいんでしょ？　まー君と別れたら、大学なんか行けないよ」

弥　子「行けなくっていいよ。ママ！」
浩美、乱暴に冷蔵庫の扉を閉めて。

浩　美「あー全く考え過ぎ。神経過敏！　バカバカしい！　全くあんたは何でもかんでも大袈裟なんだから」
弥子の身体の力が抜けていく。
浩美、吐き出す様に。
浩　美「まー君居なくて、どうやって生活してけっての」
浩美、耳を貸さず、弥子を全く見ずに、換気扇のスイッチを入れ、煙草に火を点ける。
弥　子「……出来るよ」
弥子の言葉は換気扇の音にかき消され、浩美の耳に届かない。
弥子、身体を引きずるように出て行く。

○横手家・外観（夜）

月明かり。
外階段を上る弥子。

○同・玄関・中（夜）

弥子、玄関扉を開ける。
弥子、真っ暗な部屋の奥を覗き込んで。
弥　子「明恵？　いない？」
明恵の声「（くぐもって）弥子？　ちょっと待って」
明恵が乱れた着衣で、けだるげに出て来る。
明　恵「今、周君、周先輩来ててさ」
弥　子「あ、あ！　そうか、そっか。うん。わかった。またね」
慌てて玄関を出る弥子。

○同・外（夜）

外階段を下りる弥子。
田辺が階段下に自転車を停めている。
弥子が階段上から田辺に声を掛ける。
弥　子「誰もいないよ」

田辺、弥子を見上げる。

田　辺「（自転車を指して）乗る？」

弥　子「うん」

○道（夜）

走る二人乗りの自転車。

田辺の背中に、しっかりと掴まる弥子。

○公園（夜）

街灯に虫が群がっている。

ベンチに座る弥子と田辺。

田辺が懐からアイス最中を取り出し、二つに割る。

二人、アイスを食べ始める。

弥　子「美味しい」

弥子の目から涙が滲む。

田　辺「……」

田辺、戸惑いながら弥子を見ている。

弥　子「だいじょぶ。平気」

田　辺「やな事……あった？」

弥　子「……」

田　辺「……」

弥　子「（言い聞かせるように小声で）きっとほんとに気のせい、全部思い過ごしで……。だいじょぶだから――」

声を詰まらせる弥子。

田辺、困った様な顔で、弥子を見ている。

弥子、田辺に顔を向けて、微笑みで応える。

田辺、ポケットから紙片を取り出し、弥子に渡す。

紙を見つめる弥子。

いつもの板チョコの包み紙。

その裏、白紙部分に鉛筆で書かれているのは、文字と判別出来ない様な曲線。

とても拙い字。

「や」と「す」が鏡文字で、『やこ　すき』と書かれている。
驚く弥子、素早く紙を畳んで握る。
田辺、真っ赤になっている。

弥　子「(小声で)ありがと」
弥子、泣き笑い。

○三崎家・弥子の部屋(夜)

机に向かう弥子、田辺からの紙切れを取り出し、丁寧に広げて眺めている。
拙い字。
弥子、辞書を引っ張り出して開く。
間に挟まる、押し花になった四葉のクローバー。
居間の浩美と橋本の笑い声が聞こえてくる。
唇を引き結び、一瞬、ギュッと目を瞑る弥子。
辞書の間に、田辺からの紙片も挟み、本棚に戻す。

○道

学校帰り、制服姿の弥子と明恵が歩いている。
明恵の制服はだらしなく着崩されている。

明　恵「夏休み明けた途端に面談とかさ、ふざけんなよ。毎日登校してこないと卒業させねぇとか脅してくっしよ」
弥　子「明恵は頭悪くないんだから。ちゃんと受験しようよ。先生たちも勿体ないって思ってるんだよ」
明　恵「弥子はいいよね、一番いいとこ名門青光確実だもんね」
弥　子「そんな……。……ね、チー坊は……？」
明　恵「？」
弥　子「チー坊はどうするか知ってる？」
明　恵「どこも行かないんじゃない？」
弥　子「え？」
明　恵「受験しないっしょ」
足を止める弥子。

弥　子「しないでどうするの？」
明　恵「さあ、なんとかなるんじゃないの。周先輩だって行ってないし」
弥　子「……そう」
明　恵「うちの中学、高校行かない子、毎年何人かいるよ。里香も行けないだろうし」
弥　子「え？　里香も？」
明　恵「里香んちの店やばいみたい。金無いって」
弥　子「チー坊もそうなの？」
明　恵「そっか。弥子はチー坊んち知らないもんね」
明恵、弥子をまじまじと見る。
明　恵「（面白がる口調で）チー坊の母親っていっつも腹でっかいの。兄弟六人だっけ。ボロッボロの家だよ」
弥子、目を見張る。
明　恵「一番上の兄貴は高校行ったけど、二番目は行ってない。チー坊はその下三番目」
弥　子「……」
歩きながら考え込む表情の弥子。
明　恵「ちょっと遠回りしてチー坊んち見てく？」
明恵、弥子の返事を聞かず、ずんずんと進んで行く。

○田辺家の前の道

明恵と弥子が舗装されていない湿った道を進む。
軒の低い、トタン屋根とつぎはぎの目立つ板張りの家。
明恵が指差す。
明　恵「ほら。ここチー坊んち」
ちょうど、家の玄関から、分厚い眼鏡を掛けた、だらしない格好の中年の妊婦が出てくる。
弥子は思わず物陰に隠れる。
妊婦は、何処を見ているのか分からない目つきで、正面に立つ明恵にも気づかない。
明恵が物陰の弥子の許に寄る。

明　恵「あれ、チー坊の母親。また腹ボテだったね」
弥　子「……うん」
二人は来た道を戻る。
角を曲がると、田辺と出くわす。
田辺、ギョッとしてバツが悪そうになり、その後すぐに憮然とした表情になる。
弥子、申し訳なさそうな顔になり、下を向く。
明　恵「おう、おかえり」
田辺、弥子を見ない。
田　辺「お」
田辺、ずんずんと行ってしまう。
弥　子「……。チー坊、なんか機嫌悪そうだった」
明　恵「あ？　自分ち見られたってわかったからじゃね？」
弥子、更に表情が曇る。

○中学校舎・外観

雨が降っている。

○中学校舎・廊下

雨音と吹奏楽の練習の音。
頬杖で窓の外を見ている里香に、弥子が近付く。
弥　子「ん？　里香？　何してんの？」
里　香「菊池、待ってんの。今、菊池んちにいるから」
弥　子「？」
里　香「うちの店、駄目になっちゃって」
弥　子「里香んちの喫茶店？」
里　香「そ。まずは糞親父が消えて、次は母親が消えた。ジョーハツ」
弥　子「え……？　どうして？」
里香は窓の外を見たまま。
里　香「知らね」
弥　子「それで、どうしてるの？」

里　香「家にいられなくなって。そんで菊池んとこに居る」
弥　子「おじいちゃんとかおばあちゃんは？」
里　香「いない」
弥　子「おじさんとかおばさんとか」
　　里香、前を見たまま、鼻で笑って。
里　香「そんなんが当てになるなら苦労しないっしょ」
弥　子「……」
里　香「弥子にはわかんないよ」
　　里香、くるっと弥子に顔を向けて。
里　香「チー坊、元気？」
弥　子「最近見ない」
里　香「そっか」
弥　子「……」
里　香「あいつも進学しないしね」
弥　子「……やっぱりそうなのかな」
里　香「大体、チー坊字読めないし書けないし。幾ら何でもそれで高校は行けないっしょ」
　　弥子、驚く。
里　香「知らなかった？」
弥　子「書くのが変だとは思ったけど」
　　里香、廊下の向こうを見て。
里　香「菊池来たから行くわ。じゃあね」
弥　子「うん、また」
　　弥子、窓の外を見続ける。
　　昇降口から相合傘で出て来る里香と菊池が見える。

○横手家・外観

　　雨が降っている。
　　前を通り過ぎる弥子。

○市立図書館・入り口・外

　　雨の中、弥子が出て来る。

○三崎家・弥子の部屋（夜）

雨がガラス窓に当たって落ちる音。
机に向かって、図書館から借りた厚い本を読んでいる弥子。

○中学校舎・廊下

校庭から野球部の掛け声や飛球音。

○同・教室・中

向かい合わせにした机を挟んで貴子と弥子が座っている。
教室には二人だけ。

貴　子「（書類を見ながら）第一志望は青光、併願はこの通りね。うん、今の調子で頑張って。以上！」
席を立たない弥子。

貴　子「ん？　どうかした？」

弥　子「あの、ちょっと聞いてもいいですか？……高校を受験しない生徒も居るんですよね？」

貴　子「うん、まあ……」
歯切れ悪く頷く貴子。

弥　子「田辺君もそうですよね？」

貴　子「（怪訝な顔で）田辺千紘君？　三崎さんは田辺君と同じクラスだった事はないよね？」

弥　子「はい」

貴　子「……人それぞれ。色んな考えや事情があるのよね」

弥　子「あの……、田辺君って読み書きが苦手だけど、文字が認識できないっていう障害で。それってちゃんとしたフォローがあれば……」

貴　子「……さすが三崎さんは色々博学ね」

弥　子「いえ」

貴　子「……もしそうだとして……？　田辺君に何かそういった特性、障害があるとして、どうすればいいのかな」
弥子、押し黙ってから。
弥　子「何か助けを……」
貴　子「そうね。もっと早く出来ていれば良かったわね。もうすぐ義務教育も終わるものね」
貴子の冷淡な口調にギョッとして、一瞬鋭い視線を向ける弥子。
貴子、その視線に気づくが、構わずに。
貴　子「今の田辺君が、本人が何か助けを求めてるかな」
弥　子「……（小声で）あ……」
貴　子「難しい問題よね。田辺君が助けを求めているなら、助ける事は出来る。でも本人も保護者もそれを求めてないなら無理強いは出来ないの」
弥　子「……」
貴　子「先生たちもね、色々助けになりたいと思ってるのよ、みんなの。でも難しい事も多くって……」
弥　子「……」
貴　子「誰もが最善の道を選ぶとは限らない、って先生も教師になってわかった事よ。そういう人たちもいるの」
弥　子「……」
貴　子「あなたは最善の道を選ぶ事が出来る人よ。自分がどんな人生を歩みたいか、よく考えて。可能性を、自分から潰す様な事はしないで」
弥　子「……（考えこんでいる）」
貴　子「可能性がある、って事を信じられない子が多いの、この学校。あなたは信じて頑張って」
弥　子「（神妙になって）はい……。頑張ります」
席を立ち、教室を出て行く弥子。
見送った後、緊張が解け、大きく息を吐く貴子。
抗えない無力感に沈む。

○同・廊下

教室を出た弥子、菊池が通りかかる。

弥　子「菊池！」

菊　池「（振り向いて）おう」

弥　子「進路面談？」

頷く菊池。

弥子、菊池の様子を窺いながら

弥　子「菊池は……受験……するんだよね……？」

菊　池「ああ。名前書きゃ受かるとこな」

弥子、ほっとした笑顔になる。

菊　池「……里香、来てた？」

弥　子「見てないけど。今、菊池んちに居るんでしょ？」

菊　池「いや。ここんとこ帰ってこねえわ」

弥　子「明恵には聞いた？」

菊　池「明恵も知らねえって。学校も来てねえし。つーか制服まだうちにあんだけど」

弥　子「先生は？」

菊　池「はっ？　なんも知らねーだろ、あいつら」

菊池、片手を上げて去って行く。

弥　子「……」

○中学校舎・廊下（朝）

生徒たちが朝の挨拶を交わしながら廊下を行く。

明恵が弥子を見つけて近づいてくる。

明　恵「（小声で）チー坊、パクられたよ。うちにも警察来たりしてるからさ。暫く来るの無しね」

弥　子「えっ……？　なんで？」

明　恵「万引きか泥棒じゃね？　どうせ大した罪になんないよ」

弥子、目を見開いたまま。

明　恵「警察が、うちが溜り場、犯罪の温床みたいに言うから、ママが大騒ぎしちゃって。こえーの」

弥　子「……」

明　恵「誰がたむろってたか聞かれたけど、弥子の名前は言ってないから。ママも弥子の名前は言ってないって」

弥　子「え……。あ、ありがと」
明　恵「弥子はうちらとは違うからね」
弥　子「……。今チー坊は？」
明　恵「警察？　鑑別所？　よくわかんない」
弥　子「……」
明　恵「じゃ、またね」

○三崎家・弥子の部屋（夜）

机に向かい勉強している弥子。
開いたノートの端に、一筆書きの四つ葉を書いている。
重ね書きされて、どんどん濃くなっていく四つ葉。
やがてノートの紙が擦り切れる。

○中学校舎・廊下

歩く明恵を捕まえる弥子。
弥　子「チー坊、どうなった？」
明　恵「知らない。どうなんだろ」
弥　子「先生なら知ってるかな」
明　恵「知ってても言わねんじゃね？」
弥　子「……」
明　恵「里香さ」
弥　子「里香？　ああ、こないだ菊池に聞かれた。何処にいるの？」
明　恵「あいつ、今は周君ちの中華屋で働いてる」
弥　子「え？　そうなの？　就職みたいな感じ？」
明　恵「お腹に周君の子が居るって。すっかり中華屋の嫁」
弥　子「！……そうなんだ……」
明　恵「菊池かわいそー」
弥　子「明恵は？　いいの？」
明恵、聞こえないふり。
明　恵「なんかさ、色んな事あって、ママに泣かれたんだよね。

あたし高校受験頑張る事にしたから」
弥　子「……うん。それがいいよ。がんばろ」
明　恵「いや……。うちにはママがいるんだな、って。捨てられないだけマシなんかな、って」
弥　子「……うん」

○三崎家・玄関・中（夕）

入って来て深呼吸する弥子。

○同・居間（夕）

浩美と橋本がテレビを見ている。
弥子の声「（明るい声で）ただいまー」
浩美と橋本「おかえりー」
弥　子「（入って来て）ただいま、まー君」
橋　本「メロン貰って来たんだ、やっちゃん好きだろ」
弥　子「やったー、ありがと」
にっこりと答える弥子。

○同・弥子の部屋（夜）

勉強机に向う弥子。
ペンを走らす手を止めて『絶対一人暮らしする本』を取り出して眺める。
顔を上げ、唇を結び、本を仕舞って勉強に戻る。

○中学校舎

雪が降っている。

○中学校・教室・中

窓の外、降る雪が見える。

黒板に『公立校入試まであと１４日』。
ストーブのシューという音と、紙の上を走るペンの音だけ。
静寂の中で机に向かう、弥子を含む生徒たち。
いくつかの空席。

○桜のある通り・全景

T　『三年後』

○同・バス停

大人びて、高校の制服姿でバスを待っている弥子。
満開の桜の下、花びらの舞う中をバスが来る。
バスが停まると、派手なスカジャンに女物のサンダルをつっかけた田辺が降りてくる。
面影なく、鋭い目つきの田辺、弥子に気づいたのかどうか、無表情にすれ違う。
弥子は動揺したまま、バスに乗る。

○バス・車内

座席に座った弥子、窓の外を見ている。
歩く田辺が見える。
バスが動き、弥子は振り返って田辺を見ている。

○道

弥子の乗るバスと並走する二人乗りの自転車。
乗っているのは中学生くらいの少年と少女。

○バス・車内

窓からは田辺が見えなくなり、前を向く弥子。

鞄から赤本を取り出し、挟んである栞を見つめる。
チョコレートの包装紙と銀紙、四葉のクローバーの
押し花をラミネートした栞。

弥子M「それきりだった。それきりチー坊に会う事はなかった」

○道

また、桜の樹の下、バス停で止まるバス。
バスを追い越して行く二人乗りの自転車。
舞う桜の花びらの向こうへ。
スカートをはためかせて。

〈了〉